

## 踏切の発明

20231210-20231219

踏切が発明されたのでこれからは町中に踏切が見られるだろう。

踏切の向こうにいるのが靴切り職人だったとしたら靴の内側に誰がいるのか聞いてみたい。聞いたとしても電車の音で答は聞こえまい。靴の中の亀は外に出てこないだろうし、唇の間に苔が生えてしまえば、靴切り職人ではいられない。列車が通り過ぎると靴切り職人の姿は見えなくなる。

踏切の向こうにいるのが水筒から水を飲んでいるランナーならどこまで走り続けるのか聞いておきたい。この踏切で彼の疾走は終わりになるかもしれないからだ。水筒の水が最後の一滴までしたたりおちるとき列車は踏切を横切る。

踏切の向こうで絨毯をひろげて座っている異国の入道、汝はいずこよりきたれり。その絨毯が空を飛べることをあなたは知らないのだろうか。それとも電車を待っていたいだけなのか。

踏切の向こうには、ライオンとその子供達がくつろいでいる。子供達はお互いに絡み合い、母親から離れようとしな。母親は無表情に私を見ている。踏切があげばすぐにも襲いかかるのだろう。私は子供達の餌にちょうどよい体重ではないか。それとも私の体臭が食欲をそそるのだろうか。列車は来ない。

踏切の向こうには老婆が横になっている。息をしている。目は閉じている。盗賊が金目のものを奪い、殴り倒したのだろうか。盗賊は電車に乗って逃げ去ったあとかもしれない。老婆はいつまでも目を閉じている。いつまでも呼吸を続けている。

踏切の向こうで子供時代を思い出している中産階級の婦人がいる。首から下げた名札に涙の雫が落ちている。涙が止まることはない。夜走る列車の窓からはさまざまな色の光が漏れ涙がそれを反射している。

踏切の向こうでハーモニカを吹く笛吹鳥がたたずんでいる。どんな歌を吹いてみようかと悩んでいるのだろう。ハーモニカを吹くのが初めてなのかもしれない。調子の外れた音しか聞こえない。遠くで列車の発車を知らせる警笛が鳴っている。

踏切の向こうに小さな蛇口がぶら下がっている。すこしずつ水が滴っているが、あたりには誰もいない。体に悪い水なのかもしれない。それとももう水を飲む人などこの町にはいないのかもしれない。

踏切の向こうには膝が落ちている。近くの駅に落ちていた膝だ。緑の縁取りをした落とし物札がついていてすこし擦り傷がついている。膝のない誰かが探しているだろう。

踏切の向こうにはトラックで運ばれた積荷がならべられている。荷物の容器はどれも同じ模様が印刷され少し震えている。いずれ列車に積まれて遠くに運ばれるのかもしれない。あるいは、荷物はその場所に捨てられているだけかもしれない。列車のモーター音が遠くで聞こえる。

踏切の向こうには映画同好会の面々がいる。斉藤と鈴木と宮下と玉田と長嶋だ。もう一人いたような気がするが誰もその人の名前を覚えていない。映画同好会は近くの映画館にいくのだろう。みんな楽しそうだ。もう一人の会員のことは気にしていない。

踏切の向こうでは十五分前に発車した特急列車がこちらに向かって加速している。特急は線路のない道を走るときまったく音を立てない。踏切はその接近に気づいていないようだ。特急列車が踏切に到達する前に各駅停車がその前を通り過ぎる。

踏切の向こうには脱線もどきが座っている。からまった脱線もどきの線路はときどき動いているようだ。線路が生きているわけではなく、脱線した線路の間から兎の耳が覗いている。

踏切の向こうには鯨のいない海がゆっくりと波打っている。海ではなく湖かもしれない。鯨ではなく旅客船かもしれない。今年の高苔の取れ高は去年の二倍になるだろう。

踏切の向こうには概念としての点線が描かれている。おそらく点線に沿って踏切を切り離せるようになっているのだ。切り離したら町はばらばらになってしまうだろうか。列車はどこを走るのだろうか。緊急事態にはそれが必要なことなのだろう。

踏切の向こうには沿線の主要な駅が並んでいる。列車に乗ったことがないので駅を見ても駅前の様子などはわからない。駅は地図の上の順序に従って並んでいるので、駅の名前を覚えるのはたやすい。

踏切の向こうには標識がある。標識を見てしまったらその指し示す意味を考えなくてはならないだろう。「止まれ」だろうか「進め」だろうか。それとも「目を開けろ」であるかもしれない。「汝自身の法に従うな」であるならばそれは標識とは言えない。

踏切の向こうには月の光の落ちる井戸がありその井戸の水が遠くの踏切の蛇口から流れ出る。ランナーが飲むための水なのか、誰も飲まないのかは知らない。もとは光だというのに蛇口からでるものは灰色でちいさい音がする。

踏切の向こうにははじまりと終わりがいて、町の誰もがその両方を嫌っている。自分のはじめでもなければおわりでもないという確信があるのだろうか。はじまりも終わりもこの町に入ることはいらないだろう。

踏切の向こうでは、忘れるわけのないことを忘れる。忘れやすいものはすぐに忘れてしまうから、忘れずに残った何かを忘れたいのだろう。それでも忘れなかったなにかは忘れられていないことに気づかない。

遮断機の発明が知られるようになったら、町は通りにそって遮断され誰も家から出られなくなるだろう。